



十津川村の  
盆踊り  
解説集  
— 奈良県最南端・十津川村の踊り十景 —



本事業は令和2年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）の補助を受けて実施しています。



## 目次

- 2 はじめに  
文/佐古金一
- 4 十津川村の盆踊り概要  
文/中川眞
- 6 奈良県の風流踊り（太鼓踊り）  
文/森本仙介
- 盆踊り十景  
文/中川眞 イラスト/土井麻利江
- 8 盆踊り十景 ① 谷瀬
- 10 盆踊り十景 ② 神納川
- 12 盆踊り十景 ③ 風屋
- 14 盆踊り十景 ④ 湯之原
- 16 盆踊り十景 ⑤ 武蔵
- 18 盆踊り十景 ⑥ 小原
- 20 盆踊り十景 ⑦ 折立
- 22 盆踊り十景 ⑧ 平谷
- 24 盆踊り十景 ⑨ 西川
- 26 盆踊り十景 ⑩ 出谷
- 28 復元  
文/大谷芳史
- 盆踊りの担い手  
文/中川眞
- 29 盆踊り一口メモ  
文/中川眞
- 30 地区それぞれ 子どもたちへの伝承  
文/土井麻利江
- 31 盆踊りの未来について  
文/久保田裕道
- 32 盆踊りを語る（一）  
更谷慈禧（前十津川村長）  
聞き手・文/ 土井麻利江
- 33 盆踊りを語る（二）  
小山手修造（十津川村長）  
聞き手・文/ 中川眞
- 34 あとがき

—奈良県最南端・十津川村の踊り十景—

# 十津川村の盆踊り 解説集



盆踊りの開催に関する情報は、  
電話 0746-62-0001（十津川村役場）までお問い合わせください

表紙・表紙裏写真/西岡潔撮影



# はじめに

文／佐古金一

(十津川村文化協会 会長)

盆踊りは、昔から農作業や山仕事をしてきた村の人々が、先祖の霊を祀るとともに生活を楽しむために産みだされ、今日まで継承されてきました。舞扇を両手あるいは片手に持ち、太鼓に合わせながら、古くからの詞章を伝える音頭に乗って演じられる盆踊りは、一年の最大のハレの日でもありません。道を普請したりお墓にお参りしたりしながら霊をお迎えし、ともに食べ、ともに踊ることによってお盆の日々を過ごします。昔は、いくつもの盆踊りをはじめ、連日連夜踊っていた人もあると聞いています。

いつしか十津川の盆踊りは多くの人々に知られることとなり、一九七〇年(昭和四五)の大阪万博をはじめ、様々な民俗芸能大会に招かれて踊るようになりました。そして大踊りについては一九八九年(平成元)に国の重要無形民俗文化財に指定されるなど、我が国の大切な文化遺産として認定されました。

しかし近年では過疎化の影響もあって、踊らなくなった地域もあり、盆踊りの継承について私たちは危機感を抱いております。それを乗り越える手立ての一つとして、全ての踊りの映像記録を行い、アーカイブとして保存するプロジェクトがスタートしました。二〇〇三年(平成十五)には文化庁の「ふるさと文化再興事業」で村内六地区の盆踊りが収録され、二〇二二年(令和三)には同じく文化庁の「地域文化財総合活用推進事業」にて四地区の撮影が実施され、現行の盆踊り全十地区の映像がデジタル化されました。またそれ以外に過去に遡って撮影された九百項目に近い踊りのビデオもデジタル化され、大きなデータベースとなりました。さらに歌詞集も編纂され、今後の継承や新たな学習のために活用される予定です。

私たちは村の誇りである素晴らしい盆踊りを後世に末永く伝えることを大きな使命であると考えています。アーカイブ化の取り組みを村民に広く周知して、自らが生まれ育った郷土への誇り、愛着を醸成するとともに、村外の方々にもオンラインなどを通して、村の文化を知っていただきたいと願っております。

近年、大学生をはじめとして、遠隔地の方々も盆踊りにやって来られる機会が増えました。私たちは踊りに来られることを心より歓迎いたします。ぜひ一緒に踊ってください。古くから伝わる踊りの楽しさや美しさを味わいながら、村民との交流を重ねていただきたいと思います。皆さんとお目にかかることを楽しみにしております。





# 十津川村の盆踊り概要

文／中川眞（大阪市立大学特任教授）

吉野郡十津川村は奈良県の最南端にあり、北方領土以外では日本で最大の広さをもつ村（六七・三八<sup>km<sup>2</sup></sup>）として知られています。吉野川流域の五條市から国道一六八号線を新宮に向かって南下してゆくと、深い山の重なりへと吸い込まれ、分水嶺の天辻峠を越えて天川村への分岐点がある阪本へ着きます。県の無形民俗文化財になっている阪本踊りの地です。やがて十津川村に入りますが、北端の大字から最奥までさらに七五<sup>km</sup>もあり、車で一時間半かかる距離です。村の大きさが計り知れず、沼田原は十津川の支流である舟ノ川沿いにあり、その上流に篠原という集落があるのですが、後でご紹介するように、その踊りは十津川の踊りと共通点をもっています。

十津川村は何度となく大水害に見舞われています。文化一二年（一八一五）、嘉永五年（一八五二）に大洪水の記録があり、最大の危機は明治二二年（一八八九）の水害で一六八名が死亡。多くの集落が水没し、村民二四六一名が北海道へ移住したのでした。それが新十津川村から新十津川町へと発展し、今でも母村（十津川村）との交流が続いています。北海道の開拓

は辛苦を極めたといわれていますが、生来の勤勉さと粘り強さで克服されました。新十津川では母村の盆踊りが伝承されています。

十津川村の林業再生の歩みは遅く、高齢化とともに人口減少の大波に揺さぶられています。しかし、二〇〇四年にユネスコによって登録された世界遺産（紀伊山地の霊場と参詣道）や、泉質の良さで著名な温泉などの豊かな観光資源に恵まれています。二〇二〇年に勃発した新型コロナウイルスの影響は観光業を直撃しましたが、やがてコロナの収束とともに回復するこゝとでしよう。また自然のみならず素晴らしい文化資源があります。それが盆踊りです。初めてその踊りを見た人は、その美しさに圧倒されることでしょう。見るに、そして参加するに値する盆踊りがここにあります。

## 盆踊り

十津川村の盆踊りは各字単位で踊られるのが通例で、一部地区でのみ合同の形をとっています。村には五五の大字があります。歴史的には個々に独立した村で

あったのが、徐々に寄り集まって「十津川村」となりました。地元の人が「わがムラでは……」と話すときの「ムラ」とはわが字のことです。多くの字には（今は廃校となった）小学校があり立派な神社があります。そして字には独特の「フリ」と「ウタ」をもった踊りがあります。盆踊りは字の文化的アイデンティティの証であり、字の結束を高める装置なのです。そういう意味では十津川村全体のアイデンティティに関わってきたわけではありません。しかし人口減少によって村のパワーが衰退しつつあることの否めない現状にあつて、もはや盆踊りは個々の字のためではなく、村全体の文化的象徴として存在する必要性が出てきたように思います。それが、現存する一〇字の踊り団体の新たなネットワークである十津川村盆踊り協議会の誕生（二〇一九年）へとつながりました。

十津川の盆踊りは中世後期に淵源をもつといわれる風流系の太鼓踊りと、明治末から大正、昭和のはじめに流行した民謡にフリをつけた「ばか踊り」（一部の字によっては扇踊り、民謡踊りあるいは盆踊り）と呼ばれるものに分類されます。芸能史の観点からすれば太鼓踊りが極めて貴重ですが、舞扇を駆使するばか踊りの流麗さ、華やかさも見事なものです。また、ばか踊りのなかに数え入れられるものの、明治以前の近世の要素を残した

十津川村内では盆踊りの近世史料はまだ発見されず、歴史的な解明は、奈良県全体の風流系太鼓踊りの様式（芸態、旋律、詞章など）の総合的な分析に俟たねばなりません。

## ばか踊り

ばか踊りは、大踊りがやや儀礼的要素をもっているのに対して、娯楽的要素つまり美しさやスキルの複雑さなどが印象づけられる踊りです。多くの字で二〇種類以上のレパトリーがあり、フリが異なっています。両手に舞扇をもち、回転させたり上下にさせたり、また笠や手紙の代わりにもなり、変幻自在な動きができるようになるまでには時間がかかります。村内で転居したら、転居先の踊りを習うこととなります。どこの字にも踊りの名人がいて、その方を師匠として受け継いできました。扇を使った踊りのフリにはパターンがあり、そのパターンの組み合わせによって、一連の踊りとなってゆきます。大雑把にいえば、一つの字には一〇種類近くのパターンがあります。これをマスターすれば、あとは組み合わせの問題ですので習得は楽になります。面白いのは、往々にして歌の長さと同様の長さが食い違うことで、二つの別々の宇宙が巡っているように感じられます。ば

か踊りの歌は「草津節」「有田節」「串本節」

口説踊りも演じられます。太鼓踊りと口説は歌詞（詞章）が固定されていますが、その他の扇踊りでは膨大な詞章ストックの中から歌詞が任意に選ばれたり、即興的に歌われたりします。

盆踊りは旧暦の八月十四日や八朔（九月一日）、春秋の彼岸にも踊られていたという記録がありますが、現在では八月一三〜一五日に行われます。午後七〜八時頃に開始し、午前〇時頃には終わりますが、なかには午前二時までというところもあります。昔は夜明けまで、しかも二晩、三晩と続けて踊っていたのですが、近年は短縮化されています。

踊りの場所は野外と室内（公会堂など）ですが、昔は室内が多かったようです。一遍上人の念仏踊りでは室内で踊っていますから違和感はありません。他方で、練り歩きながら辻々を廻っていた例もあり、野外もまた現場であり得ます。盆踊りという輪になって踊るイメージがありますが、十津川では必ずしもそうではなく、例えば西川区では多くは横に列をなして並んで踊ります。また太鼓踊りも基本は列になって踊ります。盆踊りの様々な形態が見られることが十津川の魅力です。

## 大踊

民俗芸能ファンのお目当ては、なんと**いっても大踊**でしょう。西川、小原、武

「鴨緑江節」などの民謡が中心で、少なからず同じ民謡が字間で共有されていますが、フリは異なることが多く、似ているのは例外的です。基本的には各字の創意でフリ付けがなされているのです。

十津川村の盆踊りは稀有な様式美と歴史性をもつ我が国の貴重な財産といえますが、村とともに近い将来、存亡の危機に見舞われる可能性があります。踊り団体の方々はひしひしとそれを感じられ、継承への新たな試みもされています<sup>※1</sup>。一九八五年の全村調査では二四字で盆踊りが開催されましたが、二〇二〇年の調査では一〇字に減っていたことが判明しました。四〇年近くで半数以下になったのです。いかに状況が厳しいかわかります。

それを克服する動きとして、近年には大阪市や奈良市といった遠隔の都市で、十津川盆踊りの定期的な稽古が始まりました<sup>※2</sup>。盆踊りの季節には帰省者のみならず、十津川とは無縁の都市の人々が十津川へ踊りに行くようになってきたのです。つまり、十津川の盆踊りは十津川だけの踊りではなく、もっと広範囲の地域の人々の踊りになりつつあるのです。村の人と都市の人が一緒にあって盆踊りを踊り、継承してゆく。そこには予想もしない未来がひらけているのかもしれない。

大踊は芸態と歌詞（詞章）並びに旋律の比較分析から、篠原踊りとの関係が深いと考えられています。篠原から峠を越えてつながっていた大字旭の迫集落（現在はダム湖の底に沈んでいます）の踊りのほぼ全てが篠原踊りと共通していました。同様に、沼田原や谷瀬といった周辺地域も、大踊こそ早く消えましたが、「あわれたつた」「長崎」「白糸」「花買って踊り」「雪原踊り」などといった扇踊りを篠原と共有していました。谷瀬には明治の末に篠原から転居してきた女性が篠原の扇踊りを熱心に教えたとのことだ。

一方で、それより南の地域では、これ

らるの扇踊りはなく（別の扇踊りがある）、逆に大踊がすっかりと残っています。十津川の人には「山の方、海の方」という表現で村の南北を言い表します。篠原風の扇踊りが中心に残っている北部が「山の方」であり、太鼓踊りが残っている南部が「海の方」です。南部の大踊は、さらに三村区の小原、湯之原、武蔵のグループと、西川のグループの二つに分かれます。小原では現行の大踊のほかに「お宝踊り」「お花踊り」などが、武蔵には「十三四五」「鎌倉」などが、湯之原には「小鷹」が大踊系としてありますが、現行の大踊と「小鷹」以外は休止状態です。太鼓踊りの保存状態は西川が最もよく、「よりに」「かけいりく大もち」「かまくら」「しのび」「おはな」が残っています。西川の「よりに」は三村区の大踊と基本旋律は同じですが、フリは異なります。また西川の「かまくら」「湯之原の」「小鷹」「小原の」「お宝踊り」はほぼ同じ旋律ですが、これもフリは異なります。詞章やフリは異なるものの旋律財の共有という事実が、南部の大踊り相互の深い関係性を物語っています。そして西川の「いりは」と篠原の「入波踊」は旋律面で共通部分を多くもっており、西川と篠原の歴史上の関係を示す証左となります。ただ、太鼓踊りがどのように十津川全域に伝わったのかの詳細は不明で、そもそも篠原に太鼓踊りが伝播してきた経路、経緯もまた判然とはしません。

※1 本誌P28 大谷芳史「復元」参照  
※2 本誌P28 中川眞「盆踊りの担い手」参照



# 奈良県の風流踊り（太鼓踊り）

文／森本仙介（奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課主査）

## 風流と風流踊り

古代末期から「風流」という言葉は装束や道具の派手な飾りの意味で、そこから趣向を凝らした造り物、仮装行列、そしてそれにもなう歌や踊りの意味として用いられるようになります。さらに院政期から鎌倉期の祭礼では、山鳥の毛をつけた笠をかぶり豪華な装束を着て、京の町人や京郊村民が領主や貴人宅を訪れて歌舞を演じていました。このような歌や舞がともなうと、風流は「拍子物（囃子物）」とよばれるようになります。室町期になると、盆の念仏風流、臨時祭礼の風流、雨乞いの風流と多様な風流囃子物が登場しました。

戦国期には、流行歌謡の小歌を組み合せて数番の踊り歌にし、歌詞の内容に合わせて踊りの名前と衣装、持ち物等を揃えた踊りが登場し、京都、大坂、奈良などの都市部に流行しました。これがいわゆる「風流踊り」です。

## 奈良県の風流踊り

南都（奈良市周辺）では、室町末期に郡十津川荘記」には、「七月十五日には土俗相聚まり、村々の寺に至る。寺内に舞堂有り。中央に炉を切る。その炉をめくりて舞ふ。皆女なり。その歌は古雅にして、多く吉野の事なり。」とあり、旧暦七月一五日の盆に集落の寺院境内の「舞堂」の中で、中央の炉を巡って女性が輪踊りをしていたこと、歌詞の多くは吉野のことを詠んだ古風で優雅なものであったと記されており、既に幕末には女性が扇を持った盆の輪踊りが寺の堂内で踊られていたことがわかります。

一方、前者の「大踊り」と総称される踊りは、現在は小原と武蔵、湯之原、西川地区の四カ所にだけ伝承されています。古い風流踊りの形を受け継ぐ、男性が中心となる勇壮な太鼓踊りです。武蔵・小原の「大踊り」と西川の「かけいり」は盆踊り全体の締めくくりで踊られるとともに、死者の霊を供養する燈籠の列が加わります。また武蔵・小原では仮装した道化が出ます。西川では「大踊り」を「ほとけの踊り」と称していました。

## 大踊りと小踊り

「大踊り」は、武蔵と小原では一曲の演目名ですが、西川では、「よりこ」「いりは」「かけ入り」の総称です。しかし、武蔵・小原の「大踊り」と西川の「よりこ」「かけ入り」に対し、西川の「いりは」だ

は主に盆に踊られました。近世初期以降は農村の雨乞いで踊られることが一般的になってきます。特に奈良盆地では、念仏囃子物の系統であると考えられるナモデ踊りが発生し、幕末まで北は現在の生駒市・奈良市から南は橿原市・桜井市・高田市あたりまで奈良盆地一帯で雨乞いの太鼓踊りとして爆発的に流行しました。しかし、県内のナモデ踊りは明治初頭に衰退し、各地の神社に奉納された絵馬の他、吉野川流域の「国栖の太鼓踊り」（吉野町国栖）、「丹生の太古踊り」（下市町丹生地区）、「東川の太鼓踊り」（川上村東川地区）の役名や囃子の一部にわずかにその痕跡が残っているだけです。なお、「大和神社の紅して踊り」（天理市朝和地区）は戦後に復活した踊りであり、ナモデ踊りの形式を伝えていきます。

現存する奈良県の風流踊り（太鼓踊り）は、ナモデ踊り系以外では、奈良市の東部山間に三重県伊賀地方の踊り分布圏に属する「大柳生の太鼓踊り」（奈良市大柳生町）、「吐山の太鼓踊り」（奈良市都祁吐山）が伝承されていますが、さらに県南部、吉野西奥の十津川流域では別系統の風流踊りが伝わっています。それが、「篠原お

けは芸態が異なっています。

小原と武蔵、湯之原の「大踊り」は二部構成になっています。最初の「元うた」では、男性の片手打ちの太鼓打ち、女性の扇踊り、笹竹に吊るした切籠燈籠の各列が横に並び、ゆるやかなリズムで踊ります。「元うた」の後、扇踊りと燈籠が輪踊りに変わっていき「せめ」の歌になると、新たに太鼓受けの列が輪の内側に加わり、太鼓打ちは左右に跳ねながら太鼓を打ちます。早いリズムとなり、燈籠は勢よく走り出して終盤を迎えます。また西川の「よりこ」では、まず太鼓打ちと女性の太鼓受けが数列の横列を作ります。男性の音頭取りが歌詞を一節ずつ唄いながら太鼓を打ち、ここに扇踊りの列が加わり、皆で同じ歌詞を繰り返して唄いながら早くなっていきます。最後には囃子と太鼓だけとなる短い「せめ」が付きます。さらに「かけいり」は「よりこ」に輪踊りの「大もち歌」を加えたもので、燈籠の列が加わります。小原・武蔵、湯之原の「元うた」「せめ」の様式は西川の「よりこ」「大もち歌」と前半・後半の太鼓様式が逆になるだけで、それ以外はほぼ共通した構造になっており、「大踊り」以外には見られない十津川独自の風流系の踊りです。

一方、西川の「いりは」（「いりは」に別曲の「お江戸」が続く）では、男性の踊り手は首から吊るした太鼓を左右から

どり」（五條市大塔町篠原）と「十津川の大踊」（十津川村）です。県北部・吉野川流域の太鼓踊りがおもに雨乞いで踊られるのに対し、前者は正月の神事、後者は盆に踊られるというところに大きな違いがあります。華麗な衣装や持ち物を伴う十津川に対し、「篠原おどり」は、そのような見た目の風流を欠いており、二つは一見すると別種の踊りに見えますが、歌詞や踊りの芸態、音楽からは同じ系統の風流踊りに分類できるものです。

## 重層的に伝承されて来た十津川の盆踊り

十津川の盆踊りの最大の特徴は、近世から昭和初期までの流行歌の旋律・歌詞が重層的に伝承されていることです。「大踊り」とそれ以外の踊りの大きく二種類に分かれ、後者は「馬鹿踊り」と総称されます。阪本踊り（五條市大塔町阪本）と同様、祝い歌系や口説系の踊りも含まれていますが、大部分は里謡や戦前の流行歌も取り入れた民謡系の所謂盆踊りです。短い歌詞を何番も繰り返してリズムに踊るもので、多くは二枚扇の踊りで、扇の骨に親指を引っかけて回したり、翻したりして巧みに扱う女性中心の踊りです。

弘化四年（一八四七）頃の成立とされる『和州吉野郡群山記』所収「和州吉野

バチで打ち、その背後で女性が扇を両手に踊るものです。室町後期から近世初期に流行った小歌を組歌で採用し、ゆるやかな歌謡部の間奏部に小刻みなリズムの太鼓と囃子だけのセクションが繰り返して挿入されます。同じ熊野川水系の篠原踊り（五條市大塔町）や大瀬の太鼓踊り（田辺市本宮町）にも見られる典型的な風流踊りの構造を持っています。

文化財指定によって統一の名称が与えられる以前は、西川では「よりこ」「かけいり」が「大踊り」と呼ばれており、「いりは」はこれと区別して「小踊り」と呼ばれていました。リズムカルではなやかな民謡系の踊りに押されて戦後にはほぼ絶えましたが、同種の典型的な風流踊りは、武蔵・小原・湯之原等でも「本踊り」と呼ばれていました。文久元年（一八六一）の小原の歌本には「お宝踊」「お花踊」「世の中をどり」「ひめこをどり」「いりはをどり」「お舟をどり」「恋の踊り」「丑若踊り」「忍び踊り」「さつまをどり」「深草をどり」の詞章が記されています。他にも村北部の篠原踊り系を除いても、戦前は「ひんだ」「こたか」「ごもん」「鎌倉」「三三五」「お城」「お富士」「ささら」「ゆり若」「吾妻」「長者」「因幡」「連賀」「篠竹」等の風流踊りが伝承されていました。



大柳生の太鼓踊り（野本暉房撮影）



国栖の太鼓踊り（奈良県提供）



篠原おどり（野本暉房撮影）

### 【参考文献】

- 「十津川の盆踊り」(谷村晃編、アカデミア・ミュージック、1992年)
- 青盛透「奈良県の風流・盆踊り―その歴史と芸態―」(奈良県の民俗芸能、奈良県教育委員会、2014年)
- 青盛透「篠原踊りとその類型―太鼓打ちの芸態比較を中心に―」(篠原おどり解説書―歌と踊りの歴史―、五條市文化遺産活用実行委員会、2018年)
- 森本仙介「郷土芸能探訪6〇十津川の大踊」(文部科学教育通信 520, 2021年)





谷瀬の盆踊り (中村幸夫撮影)

男の人は不幸や、てんよそから  
みんなのどきにくるから。  
谷瀬の女性はきれいなから。  
ほんまによその男が、  
い、い、い、くるんや

谷瀬来たとき、この足踊りは全然  
違ふなあと、思、た、楽、しい、か、た

い、い、い、ひ、と、つ、の、木、村、や、け、と  
江戸時代政治の、い、い、ま  
と、ち、ら、か、と、い、う、と、山、唄、り、て、  
山、唄、り、か、ら、入、り、ま、さ、た、ア、キ、カ、  
ア、タ、カ、た、ま

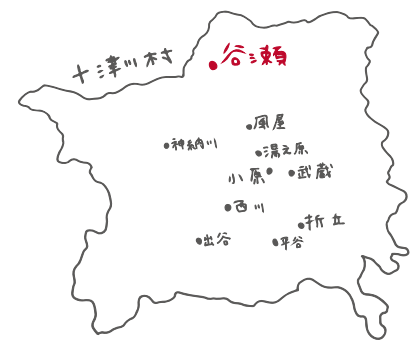


盆踊り  
十景  
①

たにぜ  
谷瀬

谷瀬の世帯数 42、人口 70  
(令和4年1月1日)

文/中川眞  
イラスト/土井麻利江 (一般社団法人 road 代表)



谷瀬は十津川村北部の中野村区にありま  
す。十津川を挟んで対岸の大字上野地から  
右岸の谷瀬に向かって架けられているのが  
有名な「谷瀬の吊り橋」です。全長二九七メー  
トル、高さ五四メートルの吊り橋は足がす  
くんでしましますが、年間三〇万人が訪れ  
る有数の観光資源になっています。かつて  
谷瀬から十津川を越える手段は河原に渡さ  
れた丸木橋だったのですが、洪水のたびに  
流されて不便であったために、谷瀬の住民  
が共有林の売却や住民自らの負担によつて  
一九五四年(昭和二九)に建設した、そも  
そもは生活のための橋だったのです。今で  
は八月四日の「はしの日」に和太鼓の演奏  
が橋上で行われるなど、十津川村北部屈指  
のランドマークとなっています。ちなみに  
十津川村には吊り橋が全部で六〇、七〇基  
あるといわれています。

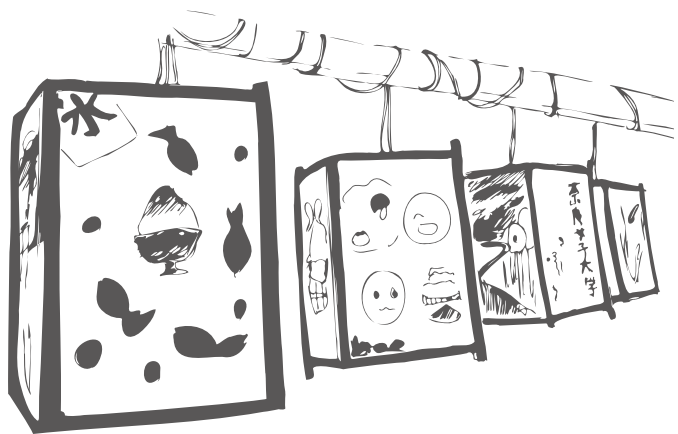
プロジェクト」は奈良女子大学、奈良県立  
大学の学生を巻き込みながら、様々な仕掛  
けを構築してきました。集落内の散歩道を  
整備し、吊り橋が見渡せる展望台や水車な  
どを新築しました。空き家を活用した「こ  
やすば(小休場)」は休憩所であると同時に  
住民や訪問客の交流拠点となっています。  
「ゆつくり体験」という、集落の日常を知っ  
てもらうワークショップ(五月のお茶摘み、  
六月の田植え、十月の稲刈りなど)が実施  
され、谷瀬でとれた酒米で純米酒「谷瀬」  
を作っています。

盆踊りは八月一三日に公民館(公会堂)  
で実施されます。四、五頁に書いたように、  
十津川の盆踊りは中野村区を中心とする北  
部の様式と、三村区、西川区など南部の様  
式の二つに分かれますが、谷瀬は北部の伝  
統を残しています。大踊はありませんが、  
篠原から嫁いできた女性が明治の末頃に伝  
えた扇踊りが、今日まで「雪原」「哀れ龍田」  
「白糸」「花買うて」として伝承されています。  
右手に舞扇を一つ持って、左右に大きく振  
る、斜めに上げ下ろしする、正面に向かっ  
て裏返してかざすなどの所作を組み合わせ  
て踊ります。扇踊りには他に「長崎」があ  
りましたが、今は踊られていません。以上  
の五曲は、現行の篠原踊りでもほぼ同じ形  
で存在しています。昔は中野村区一帯でこ  
れらの扇踊りが踊られていたという記録が  
残っています。

約一〇種類余りあります。手踊りとはいえ、  
「谷水」「合時いた」では扇を二枚、「やとや」  
「北山」では一枚持ちます。扇を持たない踊  
りに「やつちよん」「かみで」「五條」「キッ  
キョ」「すもも」「追分」があります。谷瀬  
の場合、手踊りは篠原から伝わった扇踊り  
以外の踊りを指す総称となっています。で  
すから扇を持っていても手踊りというので  
す。十津川村南部の地区では「大踊」と「ば  
か踊り」に分類されているのと似通って、「扇  
踊り」と「手踊り」という分類になってい  
ます。手踊りの振りには中野村区の住民の創  
意で作られたと推測されますが、扇踊りの  
影響が強く感じられます。特に「やとや」「北  
山」にそれが見られます。手踊りの中で最  
も技巧的なのが「追分」で、複雑な動きとなっ  
ています。

「追分」「五條」という曲目は、西川区に  
も「追分」「五條や橋本」という形で存在  
しています。踊りの所作や扇の扱いは全く  
異なりますが、興味深いのは歌の旋律です。  
歌詞も全く違うので、少し聴いただけでは  
分かりにくいのですが、よく聴くと基本の  
旋律線をたどれます。この曲が昭和初期ま  
でに両地域に入ったと仮定すると、およそ  
一〇〇年の間に徐々にそれぞれが変化して  
いったのです。民謡の地域的変容を考える  
上で貴重な証拠になるのではないかと思います。





盆踊りをやることにより、  
帰ってきた人同士が会える  
祭りがあふから帰ってくる人がいる  
いろいろな可能性が  
盆踊りにはあるから

来たい、という人に来てもらったら  
いいよと、これが「アノ」から、アノ  
神納川は糸冬わたりだ

人が「アノ」なくなった場所には、さびたポイント  
回は外あのは美しい  
カズキにやると折れる  
ちよとすう油をさし時間はおかふけれど  
ゆっくいあの子のが「確定」



神納川の盆踊り (十津川村教育委員会提供)

盆踊り  
十景  
②

神納川

かんのがわ

神納川の世帯数 29、人口 52 (神納川区全体)



十津川沿いの大字川津から支流(神納川)を遡ってゆくと、内野、山天、三浦、五百瀬、杉清という五大字に出会います。神納川区は村内で最も人口が少ない区です。川沿いに続くように集落が形成され、小学校も明治以来、一校(旧五百瀬小学校)に集約されてきたことから地区の一体感は強く、他の区では各字で踊りの振りは異なるどころ、ここでは区全体で共通しているといわれます。

過疎化への危機感は強く、なんとかしようという動きが住民から現れ、二〇〇八年(平成二〇)に神納川農村交流体験協議会(かんのがわHBP)が結成されて、グリーンツーリズムの可能性を拓いてきました。豊かな自然資源をベースに、都市部の小学生たちの山間生活体験の場として旧小学校の校舎や敷地、周辺田畑が活用され、農家民宿が一気に増えました。この地区には熊野参詣道(小辺路)が縦断しており、昔から京都から熊野へ参詣する人々の通り路でもあったのです。特に二〇〇四年(平成一六)にユネスコの世界文化遺産に登録さ

れてからは外国からのトレッキング客も多く、民宿の需要が高まっていきました。その機運とともに、後で述べるように、長年途絶えていた盆踊りも若い住民たちの熱意によって復活したのです。

しかし甚大な自然災害(洪水や山崩れ)に襲われることが多く、一八八九年(明治二二)の大水害ではいくつもの集落が消え、二〇一一年(平成二三)の紀伊半島水害でも大崩落によって河床が上昇し、水遊びなどが難しくなったり崩落の危険がある箇所が多く残り、小学生を招く事業もストップしてしまおうという困難に直面しました。

神納川区の盆踊りは旧小学校の体育館で八月一三日に実施されます。体育館の周りには色とりどりの灯籠が張られ、屋台が出ます。踊りの数は一〇曲弱ですが、間にパンドの演奏が入ったりして、イベントのアクセントとなっています。参加者の数は約一〇〇名で、比較的若い人が多いのが印象的です。現在のレパトリーは「木曾節」「さんかみ山」「ヤットヤ」「さのさくずし(うめぼし)」「串本節」「ホイホイ」「高い山から」「ナントナント」「伊勢音頭」です。音頭は長老の森理さんから若手の岡田亥早夫さんへと引き継がれました。神納川の踊りの特徴は、テンポがゆったりしていることです。「ヤットヤ」と「さのさくずし」が技巧的で見応えのある踊りです。小辺路を通過して西川区の人との交流が過去には盛んであり、西川の踊りと似ている部分があります。例えば、「伊勢音頭」は足の運びが西川のそれ

と全く同じです。

昔は八月一三日に山天、一四日に五百瀬、一五日に内野で盆踊りが開催されていましたが、徐々に開催されなくなっていきました。現音頭取りの岡田さんが大学と就職で約八年、神納川を離れて戻ってきたところ、小学校も廃校となり人気も少なくなっているが危機感を感じ、なんとかしなくてはという事で盆踊りを二〇〇八年に復活させました。ところが、復活はしたものの自己満足のみならずおしつけているのではないかと思いついたん頓挫。そこで、踊り自体を任意参加とし、昔神納川の盆踊りによく参加していた人や、地区を楽しくしていきたいという若者、移住してきて一緒に協力してくれる人を中心とし神納川盆踊り実行委員会を設置。目標をもって自然体で再開したら、踊りを楽しみたい人たちが徐々に増えてきて定着したのです。大阪大学を中心とした学生たち(とつプロ)の参加など、外部の人たちが積極的に協力しています。音頭取りの岡田さんは復活の体験について、温故知新が大切だと思っています。変化する時代になかで、大事なものを引き継ぎまたそれを通じて成長していく。「神納川はいい所老若男女が手をにぎり古き良き日を過去とせず今日もせせと汗流す」。新たに作られた神納川の盆踊りの一文句です。この気持ちが今の神納川の盆踊りに繋がっているのだと思います。現在は、ベテランの先輩の方々からの音頭と踊りの継承が大切な活動になっています。





歌にあう詞を見つけたり、書きこんどくんや  
音頭とよ日は新聞とか本とか売んどたら  
いいこととよもん

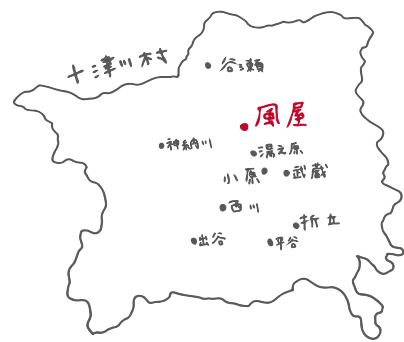
里帰りでお子さんを連れて来て、  
みんな上手に足踏、下  
雨の中、みんなよう、きてくれた

同級生みんなでいてしま、  
教えろくらいかおらん

盆踊りはお供養なので、  
一旦お合まつてもいいのはあかん  
単に娯楽ではなくて先祖への供養だから



風屋の盆踊り (十津川村教育委員会提供)



風屋といえば、ダムを抜きに語ることはできません。風屋ダムが竣工したのは一九六〇年(昭和三五)です。風屋のほか、流域の川津、林、上野地の計一〇八戸が水没しました。河岸には水田が多かったので、農業を営む人たちに大きな影響が出ました。山村の人口は増減が比較的穏やかですが、ダム工事の時は工事関係者の流入で大変な人口増となりました。一九六〇年の外来人口は五、八六六人で、その五年前の国勢調査の村の総人口二、五〇三人から単純計算をすると四七%も人口が増加したことになります。おそらく十津川村史上最大の人口になった時期でしょう。ちなみに、明治、大正時代の人口は一一、一三一人(明治三〇)、二二、九八八(大正七)というように、今日からすればかなり多い印象を受けます。特に、一八八九年(明治二二)の大水害時には北海道への移住者が二四六一人ものぼりますから、その時点では人口は一四、〇〇〇人弱あったのではないかと推定されます。しかし、風屋ダム築造時にはそ

盆踊り  
十景  
③

かぜや  
風屋

風屋の世帯数 48、人口 79

れを上回りました。一、〇〇〇人規模の飯場集落が出現し、飲食店、映画館、診療所、商店が立ち並び、街のような賑わいぶりを呈したといえます。風屋の花園小学校の児童数も一五倍にふくれあがりました。しかし、ダムの竣工や道路の整備が済むと、まさに潮を引くように人口は減少していきました。傾斜地に段丘式に並んでいた田畑と家のほとんどがダムで水没し、現在の国道一六八号線沿いに移転して、新たな集落が作られました。また、この地域の重要な生業であった筏流しがダムの出現によって終焉を迎えたのも大きなできごとでした。

盆踊りは八月一三日に、ふだんはゲートポール場になっている川べりの駐車場に櫓をたて、提灯を吊って行われます。その前の三日間ほど練習が行われます。踊り当日の開始は午後七時過ぎで、ダムの水没以前は夜明けまで踊っていたそうですが、近年は午前〇時前に終わります。ダム竣工以前には、前日に村の地芝居を上演していましたが、十津川村では地芝居の伝統がありません。現在ではほとんど見ることがありません。

風屋の踊りの特徴は明快でダイナミックな所作にあります。踊りは下から上に扇をあげたり、横八文字(∞)を描いたりという基本動作のバリエーションからなっていますが、独自の振り付けによって他字との違いが鮮明となっています。特に「籠の鳥」「ヤトヤデカエ」が「草津節」の美しさが際立っていますが、「籠の鳥」では踊りにタメが見られ、太鼓のリズムからのほんの僅かな遅れが、踊りの味をつくっています。「ヤトヤデカエ」では、下から上へ両扇を振り上げたのち、そのまま高く掲げて左へと下げてゆく動きに独特のものがあります。「草津節」では、三拍子的な動きが流れるように三種類続いていくもので、その流麗な動きは十津川の盆踊りの特性を余すところなく伝えています。近年は若手の方々の学習成果がめざましく、これからの風屋の盆踊りの展開に大いに期待が寄せられています。

風屋の盆踊りは二〇世紀末にいったん幕を閉じましたが、二〇一〇年(平成二二)に十年ぶりに復活されました。その中心人物が下垣和夫さんですが、保存会はつくっていません。十名くらいが担い手の核となっています。風屋在住の建設業今西組がスポンサーとなって、金魚すくい、たこ焼き、生ビールなどが無料で提供されています。社長によると、盆踊りは単なる娯楽ではなくて先祖への供養であり、みんなが会おう場でもあることから、やめるわけにはいかないとのこと。





湯之原の盆踊り (中村幸夫撮影)

好きな人は平谷から来たり  
西川からも来たりいます

十三津川は広いもので、色々な土地や  
行くと全く雰囲気が違う

やはり、昔の音を好きとかはあかん  
という、そういう思いであかな

「うまか、たのう」と言うてくれてね  
そでよか、と。それがもう特効薬



盆踊り  
十景  
④

湯之原

ゆのはら

湯之原の世帯数 41、人口 90



湯之原には体育文化センターがあり、公  
施設としてさまざまな用途に使われてい  
ます。湯之原は国道で車で通るとあつとい  
う間に過ぎてしまいます。十津川は大きく  
蛇行しながら流れているのが特徴ですが、  
特に大字野尻から湯之原にかけての蛇行は  
大きく、新しくできた一六八号線は、蛇行  
を申刺しにするようにトンネルによって一  
直線に結んでいます。ですから、各字をか  
すったように短時間で通り過ぎてしまうの  
です。

三村区には六字あり、一九八〇年代まで  
は全ての字で盆踊りが挙行されていまし  
たが、一九九〇年代には大野、小森、小井、  
湯之原でなくなりました。しかし二〇〇四  
年(平成一六)に湯之原では復活しました。  
その原動力となったのは、音頭取りの中西  
康廣さんでした。中西さんは大字旭の出身  
で教育畑を歩いてきた人です。一八八三年  
(昭和五八)に新任教員として神納川区の  
五百瀬小学校に赴任しました。地域の活性  
化に興味があり、中野村区の上野地の青年

団を復活させ、同時に盆踊りも復興しまし  
た。三年後に平谷小学校に転勤となり、た  
また湯之原に宅地を見つけて住み着きつ  
きました。その頃、既に湯之原の盆踊りの  
灯は消えていました。中西さんの本当の願  
いは出身地の旭の盆踊りを復活させること  
にあったのですが、過疎のためにそれは不  
可能と悟り、湯之原の盆踊りの復活に情熱  
を傾けたのです。そこでまず助成金に申請  
して、テント二張り、カラオケのスピーカー、  
音響設備、公民館のクーラー四台、扇五〇本、  
締め太鼓五セット、つまり盆踊りのため  
の用具一式を整備したのです。総代の大前憲  
視さんがそれをバックアップ、ようやく復  
活を遂げました。中西さんは先代の音頭取  
りについて歌を習い、今では二曲ほど歌  
えるとのこと。長い間、盆踊りが中止とな  
っていると、なかなか踊り手も集まらず、当  
初は苦労したそうですが、現在は軌道に乗っ  
ています。

盆踊りは一日に公会堂(公民館)で開  
催されます。湯之原は野外では行いません。  
踊りの他に、バザーや屋台が店を開き、そ  
れを目当てにやってくる人もいます。盆の  
時に集められた花代(祝儀)で、四月にパ  
スをチャーターして日帰り旅行(伊勢神宮  
や和歌山マリーナシティなど)に出かける  
のが楽しみだということです。踊りのレパ  
トリーは一曲余りで「串本節」「ホイホイ  
踊り」「関の五本松」「やんちよ節」「木曾節」  
「おかげ踊り」「有田節」「えっこらしよ節」

「笠おどり」「伊勢音頭」「大踊」「小鷹」な  
どです。風流系太鼓踊りは「大踊」と「小鷹」  
で、西川大踊保存会の大谷芳史さんの協力  
を得て、「小鷹」は二〇二〇年に「大踊」は  
二〇二一年に復活しました。しかし新型コ  
ロナ禍の影響で盆踊りが開催されず、本番  
での披露は後のこととなりました。口承に  
よると、これ以外に「世の中」「ひんだ」「ひ  
めこ」という太鼓踊りが明治時代後期にあっ  
たということです。また字間の踊りの交流  
でいえば、小井が一四日、湯之原が一五日  
ということでも互に行き来していました。

湯之原の大踊は小原、武蔵と形式的には  
共通点が多いのですが、前半の「元うた」  
の部分は、武蔵では男性と女性が交互に歌  
いますが、湯之原では男性のみです。小原  
もそうです。また終盤「セメ」で灯籠をつ  
けた笹竹は武蔵と同様に走りまわります。  
「小鷹」は首から下げた太鼓を打ちながら踊  
ります。あまり大きな動きはなく、静かな  
風格のある踊りです。

ばか踊りは全体的に動きが大きく、扇を  
二枚とも手前に裏返す動きが特徴的です。  
なかでも「おかげ踊り」は技術的に相当難  
しく、太鼓のリズムでカウントすると九二  
拍でもって一区切りという長大な踊りと  
なっています。おそらく十津川のばか踊り  
のなかでは、この踊りが最も長いといえる  
でしょう。





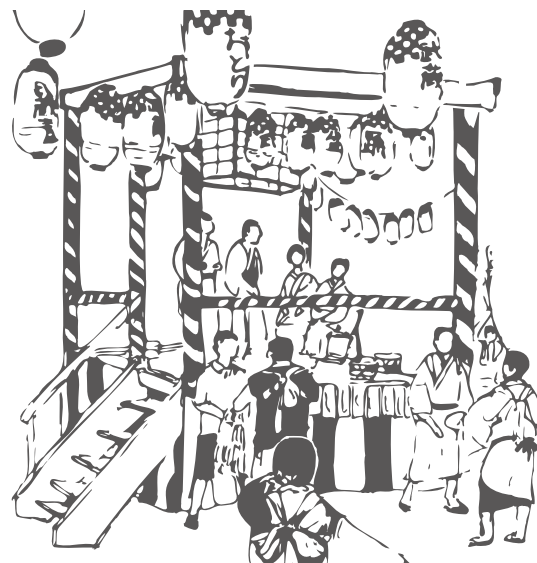
武蔵の盆踊り (西岡潔撮影)

みんがで山を越えて夜中まで  
踊っていた。川筋道でかきまて  
よく寝る音が、いたな

月太を使うと、膝をしっかりと  
曲げないと、どんとん  
速くなってしまう

盆踊りの時、口系は、アモらて  
あひいりてら、ア喜いて  
たまらなからて

肩を振るコトとしては振り振かないこと  
セウツとよめようにしてよいから



盆踊り  
十景  
⑤

武蔵  
むさし

武蔵の世帯数 48、人口 86

十津川沿いから急な旧木馬道を数分  
かかって車で駆け上がると、視界がひらけて  
まるで桃源郷のような集落が現れます。大  
字武蔵は十津川沿いの平瀬、山腹の武蔵  
尾、そして一番上にある武蔵という三つの  
小字からなっています。平瀬には宝徳二年  
(一四五〇)に源泉が湧出したとされる(東  
泉寺縁起)湯泉地温泉を中心とする旅館や  
民宿、雑貨店、銭湯、郵便局などが軒を連  
ねていますが、武蔵尾と武蔵には田畑中心  
の農村風景が広がっています。盆踊りが行  
われるのは小字武蔵にある旧武蔵小学校(現  
在は村営教育資料館)の校庭です。雨天の  
場合は旧保育所の木造の堂で実施されます。  
校庭のすぐ横には楠正勝と佐久間信盛のお  
墓があり、それらを目当てに登ってくる観  
光客もちらほら。また旧教員住宅はアレッ  
クス・カー氏の監修によっておしゃれに作  
り直され、小さなリゾートホテルのような  
宿泊施設「大森の郷」として二〇一四年に  
オープンしました。束の間の田舎暮らしを  
満喫できる一棟貸しの施設として人気が出

てきて、東京などからのリピーターのお客  
さんも増えています。他に農家民宿に登録  
されている家もあり、字全体として外来者  
を積極的に受け入れる気風があります。  
盆踊りは八月一四日に行われます。一三  
日に山を越えた大野の盆踊りに武蔵の若  
者が訪れ、翌日には逆に武蔵に客人が来る  
という習慣でしたが、二〇世紀末に大野の  
盆踊りが途絶え、現在は武蔵単独で行われ  
ています。場所は校庭ですが、この時期の  
十津川は気圧が不安定となり、三、四年に  
一度は雨に見舞われて堂内で行われます。  
堂内は狭く、踊り手が舞くように輪を作り、  
下駄の音が大きくビートを打つので、却っ  
て盛り上がり、念仏踊りの熱狂もかくやと  
いう雰囲気になります。  
櫓は宝蔵庫の虫干しや道普請を行う七月  
末にたてられ、八月一日からならし(櫓  
古)が始まります。当日は夜八時から開始、  
十一時過ぎに国指定重要無形民俗文化財で  
ある大踊が演じられ、中入り後に数番踊ら  
れて午前二時頃に終了、続いて櫓が解体さ  
れて解散となります。  
レパートリーは三七曲ありますが、実際  
に踊られるのは平均して二〇曲ほどです。  
必ず「ダンチョネ」から始まり、途中に「お  
杉くどき」「お松くどき」「笠くずし」の口  
説き系の踊りを挟みながら徐々に盛り上  
がってゆきます。中央の櫓の上に複数名の  
音頭取りがのぼり、踊り手は輪になって踊  
りますが、大踊の時のみ太鼓を持った男性

が横一列に並びます。大踊は隣接する小原、  
湯之原と同系統ですが、歌詞の中に「なむ  
あみだぶつ さあおどらいで」というもの  
が武蔵にのみ見られ、念仏踊りの系譜を引  
いていることをうかがえます。松の薄皮  
を束ねた房のついたバチで太鼓をうち、周  
りを「灯笼」で飾りつけられた笹竹を持っ  
た人たちが囲みます。音頭取りの男女が交  
互に歌う「元ウタ」と「セメ」から始まり  
ますが、途中から音頭はなくなり、エッサ  
エッサという掛け声で太鼓の音だけが響く  
と、笹竹を持った人が時計回りに走り始め  
ます。走る速度は太鼓の連打とともに増し、  
疲れ果てるまで続くのです。  
武蔵には現行の大踊の他に「三三四五」鎌  
倉「お城」という風流系の踊りがありまし  
たが、現在では踊られていません。第二次  
世界大戦前は旧暦の八月一四日に踊ってい  
ましたが夜が寒く、戦後は新暦八月一四日  
に踊るようになりました。朝まで踊るのが  
普通で、前日に大野で夜明けして踊った  
のち、峠(ヤケムネ)を超えて戻ってくる  
頃、夜が明けたという歌詞が今日でも歌わ  
れます。八月一六日には「送り踊り」として、  
また八朔(旧暦八月一日)、春秋の彼岸にも  
踊ったということです。  
武蔵は多くの学生が踊りに参加している  
ことでも特徴がありますが、中には盆踊り  
時期以外に訪れる卒業生もあり、関係人口  
を増やすという過疎地の課題の一つの答え  
がみられるのかもしれない。





小原の盆踊り (野本輝房撮影)



あはけは天の雲が降りてきて  
糸は足踊りという意未合いが  
あつて里の仕事をウモロコシ  
の皮に木是火灯をつけて足踊りこと  
がタタかた

あつて歌っている人の木黄について、  
耳で聞いて覚えた歌詞も  
自分で書いて書きとりの謄写片反て  
一枚一枚写あかなた

子どもたちは対筆を持って  
走り回りを集いかにしてね

いまは火灯籠は空に人々や  
時間がないため骨組みを  
残して再利用

盆踊り  
十景

⑥

おはら  
小原

小原の世帯数 117、人口 216



小原には十津川村役場があり、その他に警察署、歴史民俗資料館、道の駅、診療所、公衆温泉などが集結していて、村の心臓部といった場所になっています。小原に役場が開設されたのは一九四九年（昭和二四）で、それまでは同じ三村区内の小森にありました。小森は西熊野街道沿いにある交通の要衝でしたが、役場は集落の上の尾根に置かれました。旅館もあつたりで当時は賑わっていました。今の感覚からするとわざわざ尾根上に役場をつくるのは不便とは思えません。しかし昔の人々の往来は尾根伝いや峠越えが主であり、谷の深い川筋まで降りるのはかえって不合理だったのです。例えば三村区の東端には大字大野がありますが、小原から大野に向かう場合、武蔵を通り抜けて焼峠という峠を越えて到達していました。今日では車で大きく迂回して川筋に沿って向かうことになりました。焼峠道は現在では消失してしまい、残念ながら踏破することはできません。一六八号線を車で走って見える十津川は、

広い河原が特徴的ですが、昔は大峽谷であったところ、度重なる大雨による山の崩落で谷がほとんど埋まり、今日のような河原を形成しているのです。特に一八八九年（明治二二）の大水害では川底が数十メートルも上昇したと言われています。この小原でも明治の大水害では総戸数八七戸のうち三三戸が北海道に移住、その後も断続的に移住は続き、一九五九年（昭和三四）には移住が四五戸に達しました。それでも役場の移転などもあつて人口は平谷、折立に次いで三番目の多さをもちます。小原の名所といえば役場の向かい側の山手に四所神社があります。一三七三年（文中二）の建立とされ、長慶太上天皇を祀って、八幡、住吉、春日、大地主の四社殿が並列しています。また歴史民俗博物館は南朝史料や十津川郷土史料のほか、明治の大水害や人々の暮らしなどの展示がなされ、是非とも訪れたい所です。

笹竹には灯籠のほかに、染めた和紙の房を上から白、赤、緑の順に連ねた織のようなものが下げられ、見事な美しさを出しています。大踊はほかに「世の中踊り」「お花踊り」「お宝踊り」「姫子踊り」「長者踊り」がありました。今は踊られていません。大踊り以外のレパートリーは二六曲ありますが、特筆すべきは一曲もの口説群があることです。口説は物語性のある歌詞です。「お杉口説」「つばくら口説」「中山口説」「笠くずし」「鈴木水」「真口説」「おいそ口説」「笠おどり」「お熊口説」「天誅おどり」「鴨緑江節」と並べば壮観です。他の字では「笠おどり」「天誅おどり」「鴨緑江節」は民謡系に分類されていますが、小原では歌詞が固定されているものを口説と分類しているようです。民謡系の踊り「有田節」「木曾節」「串本節」など二五曲のうち、「五十三次」と「草津節」以外の二三曲は、近在の武蔵の盆踊りと完全に曲名が重複しています。しかし興味深いことに「木曾節」以外は踊りの振りが全て異なり、小原らしさが一貫しているといえます。振りの特徴としては自然な流れになっており、特に口説系は優雅な印象を与えます。また道化の姿をした人が大踊りに登場します。これは先祖の霊が降りてきて一緒に踊るといった意味合いがあるといわれています。





折立の盆踊り (田花三蔵撮影)

昔は婦人会や老人クラブが  
毎千入りのきな米が家にきつりを  
木綿の時にぶらまてくれた

こんこんやあゆの丸など差入れ  
もありこれらは大盆のときだけで  
みんな楽しみにしていた

「しゃしゃのしゃしゃは盛り上がる  
疲れるけど盆踊りやあい  
あいはよいよニヤニヤも  
盛り上がるな

東京からカレー作りに来たけれど  
そのカレーのクオリティが「高いや



盆踊り  
十景  
⑦

折立  
おりたち

折立の世帯数 116、人口 218

十津川を空から見れば、きつと大蛇がクネクネと曲がりながら動いているような眺めになるのではないだろうか。この折立では、南下してきた川が急に西へと曲流します。二〇一一年(平成二三)の台風二二号水害では、この曲り角にある折立橋にとりわけ強い泥流がぶち当たり、怒涛の渦の中に橋を呑み込んでしまいました。橋の東端近くに玉置神社へ登る車道がついています。玉置神社は紀元前三七年の崇神天皇の時代に王城火防鎮護と悪魔退散のため早玉神を奉祀したという伝承をもっています。神社のお札には「やまとなる つるおとすれば あくましりぞく」と書かれ、弦音をたてる弓神楽が継承されていることでも知られています。神域は鬱蒼たる杉の大木に覆われ、中には幹周りが八メートルを越す杉もあって、パワースポットとして訪れる人が絶えません。大字折立はこの玉置神社に東南部で接しているのです。

があり、校内の廊下の広さには目を見張るものがあります。また現在の十津川高校の前身である文武館は一八六四年(元治元年)に孝明天皇の勅によって創設され、翌一八六五年(慶応元年)に折立に移転しました。この村の教育への並々ならぬ熱意が感じられます。その創設記念碑が折立にあります。現在の折立の特色としては、若手・中堅の公務員の在住が多く、子どもの数も多くみられて、それが盆踊りの賑やかな性格にも現れています。

盆踊りは八月二三日に旧折立中学の校庭で、雨天の場合は体育館(十津川村民ひろば)で行われます。その前に二三日の練習があります。盆踊りの大きな特色は夏祭りの特色を打ち出している点で、本格的な打ち上げ花火や、クオリティの高い屋台(子どもにも買いやすいように低価格に設定)が人気で、二〇〇人近い参加が見られます。焼きそば、カレー、フランクフルト、焼き鳥、唐揚げなどの屋台がずらりと並び、二〇一九年には昔、盆踊りの中入り(休憩)にふるまわれていた「きな粉おにぎり」を復活させて販売しました。打ち上げ花火については、一三日に新宮市で大きな花火大会があって、若い人たちはそちらに行ってしまうったり、また新宮までは見に行けないお年寄りがいたりするので、自分たちでも花火の打ち上げをして新宮市に行かなくても折立でも打ち上げ花火が見れたら楽しいのでは?の発案で、二〇一〇年頃に始めら

れました。

曲目は昔は二〇曲くらいありましたが、現在では二一〜二三曲になっています。ほとんどのが扇踊りで、二つの舞扇を裏返して揃える、打ち合わせるという所作が多いのが特徴です。手踊りは「木曾節」と「鹿児島小原節」です。近隣の平谷の盆踊りと共通している演目は「鹿絶曲を含めると「帽子片手に」「丸こなれ」「やとや よいよい」など、少なくとも二二曲が確認されますが、踊りの所作は両方で異なります。「しゃしゃのしゃしゃんしゃん」は二人が向かい合っていて、飛びすぎるようにして入れ替わる踊りで、音頭取りもテンポを速くしたり遅くしたりで緩急自在、とても疲れますが笑い声の絶えない楽しい踊りです。あとは「よいしよこりゃこりゃ」も盛り上がりと言われています。

盆踊りは一時期実施されていみせんでしたが、二〇〇二年(平成一四)頃に再開されました。当時二〇代の若い人たちが中心になって始めたもので、そのメンバーは引き続き参加して輪の中心になっています。しかし踊りの上手な方が高齢化しており、中間の世代が少ないのが悩みの種です。折立の知恵は盆踊りを夏祭りとして位置づけた点で、万が一、今後、盆踊りで踊る曲目が減ったとしても、他のイベントを組み合わせることで人々の賑わいや楽しみを確保しようとしている点です。これも盆踊りを持続させるための効果的な方法といえるでしょう。





平谷の盆踊り（野本輝房撮影）



平谷の景観は中心部におけるダム湖と軒を連ねる温泉旅館、民宿がつくっています。十津川唯一の商業地域として発展し、村内で最も人口の多い字です。温泉は元禄年間（一六八八〜一七〇四年）に炭焼き職人によって発見されたといわれ、以来三〇〇年以上の歴史をもっています。その中で最大の変化は一九六三年（昭和三八）の導湯での竣工に合せて、水没する源泉からの導湯工事が行われたのです。一九六三年の完成式にて「十津川温泉」と命名されました。ですから、この導湯が行われていなかったら、現在の十津川温泉郷はなかったということになります。

ダム完成に先立つ一九五九年（昭和三四）に国道一六八号線が全通しました。つまり奈良から熊野まで至る長いバス路線が開通したのです。当時、役場のある小原から五條市まで四時間、奈良市まで五時間、新宮市まで三時間足らずでいけるといって、住民や工事関係者、旅行者の足となりました。

盆踊り景  
⑧

平谷

ひらだに

平谷の世帯数 182、人口 329

今では五條市まで一時間半程で行けますから、スピード化は以後も著しく、隔世の感をぬぐえませんが、国道の全通と導湯によって、林業中心の村から温泉や熊野古道を軸とする観光の村へと転換するきっかけとなり、そのフロントランナーが平谷になりました。南紀からの移住者も多く、サービスマンが中心で、現在はホテル、旅館、民宿が九軒、公衆浴場、スーパー、金融機関、郵便局、病院、ガソリンスタンド、スナックなどが立ち並んでいます。

盆踊りのレパートリーはおよそ三〇曲余りですが、なんとと言っても二〇〇〇年（平成一二）に村指定の無形文化財となった「餅搦き踊り」が代表的なものといえるでしょう。発起人の方々のお陰で二名のメンバーが賛同、平谷餅搦き踊り保存会が一九七五年（昭和五〇）に結成され、その保存と伝承に注力してきました。「餅搦き踊り」は必ずしも盆だけではなく、氏神の遷宮祭や家の棟上式のほか、めでたい時に踊られます。音頭は「伊勢音頭」「餅搦き歌」「松づくし」「数え歌」の順に歌われ、踊り手もいかき取り、こしき取り、搦き手、女踊りという役割に別れ、華やかな姿となります。特にいかき取り、こしき取りに小学生が当てられた時には、見るからに可愛らしい所作となります。

八月一四日の本番で踊られるのは一八曲前後です。平谷の特徴は舞扇のダイナミックな振りにあるといえます。その代表的なのは「ヤッチョン」ですが、「よいしょこら

昔は屏風に写されたりできなかったのが  
悔いて、鏡の前によく練習したもん

盆踊りを機会に、昔懐かしい人と会えり  
あの人と会えりかもしれない

ハダワであちこちの盆踊り  
には行ってはし

昔の指導だといまの子は  
何でえられないかもしれない



こら」ではそれに扇を差させながら身体を廻すという綺麗な動きが加わって、優雅さを醸し出しています。いっぽう、「笠踊り」は実際の編笠をくるくる回しながら踊るもので、田辺市本宮町松葉地区で作成された笠を使用しています。各字の踊りはそれぞれ独特の味や振りをもっていて、同じ歌でも微妙に節回しやハヤシ言葉が違います。そういう観点から平谷に比較的近い西川と折立の踊りと比較すると、興味深い現象が浮かび上がってきます。平谷では西川と共通する振りをもつ踊りが多いようです。「帽子片手に」「ほいほい」「串本節」「鴨緑江節」はほぼ西川と同様で、「さのさ節」「やとやよいよい」も類似しています。「ほいほい」は折立にもあり、扇の振りは全く一緒ですが、折立では廻るのが特徴です。また「しちりき」では足の運びが折立と全く同じになっています。他方で、「丸こなれ」は西川にはありませんが、折立と平谷にあるもののフリは全く異なり、出谷もまた異なります。ある意味で平谷は「踊りの交差点」的な場所にあると考えられるのですが、このような類同性、異同性にはおそらく具体的な要因があり、興味深いものがあります。

踊り保存会のメンバーは二四名で、音頭取りの佐古金一さんが第四代会長です。平谷は都会的なところがあって、色々な出身の人が多く、なかなかまとまりにくいのが難点です。音頭取りの後継者を育てるのも急務の課題となっています。





西川の盆踊り (佐古金一撮影)

西川の節回しも  
残っていないといけなし

「かまくら」の復曲ができたことにより  
自信がつけような雰囲気あり

人が居ないからと継承の為に安易に  
合併すると、かえって元の伝承がなくな  
り廃れていく原因になるんじゃないか

外音での出演が決まると  
やる気に繋がります



西川区は村の南西部に位置して和歌山県田辺市本宮町、中辺路町、龍神村と接し、面積が一四四・三編あり村のなかでは最大の区になっています。西川流域には上流から迫西川、小坪瀬、小山手、西中、今西、玉垣内、永井、重里の八大字が並んでいます。かつては西中の北側に大谷という字があったのですが、一九六八年（昭和四三）に最後の世帯が転居し、以後は無住となっています。現在は、この大谷と林（中野村区）は人口がゼロですが、役場の統計では五五大字の一つずつとしてカウントされています。

盆踊りは重里の旧西川第一小学校の校庭で八月二五日に行われるのですが、「重里の盆踊り」ではなく「西川の盆踊り」と呼ばれるのは、かつて西川流域各地では盆踊りが活発に行われ、しかも交流も非常に盛んであり、現在の盆踊りはそれらが集約された形になっているためです。また盆踊り以外には、龍神村から伝えられた獅子神楽が子どもたちによって伝承されています。第

盆踊り  
十景  
⑨

にしがわ  
西川

西川（大字重里）の世帯数 87、人口 165

二次大戦以前から川合神社の祭礼で舞われていたものが一旦途絶え、戦後になって改めて龍神村に習いに行つて復活させました。獅子神楽が演じられるのは村内でも西川区だけです。

盆踊りには地元重里だけではなく、流域各地から帰省客も含めた人々が訪れます。レパートリーは三〇曲を超えます。ほか踊りと呼ばれる、各地の民謡などに振りをつけたもの、例えば「有田節」「串本節」「木曾節」「関の五本松」「宮津節」「笠踊り」「今の川堀り」「追い分け」「高い山から」「五条や橋本」など二五曲のほか、西川の盆踊りといえは白眉の大踊群があります。群といふのは複数あるという意味で、武蔵、小原、湯之原で伝承されているのは一、二曲だけです。西川では六曲が伝承されています。

大踊は風流系の太鼓踊りで、和紙でできた房のついたバチで太鼓を打ちます。打つのは男性で、自ら首からかけるものと、女性に対面で持つともうもの二種類があります。六曲とは「よりこ」「いりは」「しのび踊り」「かまくら踊り」「おはな踊り」「かけ入りく大もち」です。盆踊りの時にはほか踊りの間に挟み込んで、基本的に「よりこ」「いりは」「かけ入りく大もち」が踊られます。そのほかの「しのび踊り」「かまくら踊り」「おはな踊り」は六〇年以上も途絶えていたのですが、近年に現保存会長の大谷芳史さんの大変な努力によって復元されました。その消息については二八頁をご覧ください。

これら六曲は全て異なっている訳ではなく、振りには共通点が見られます。「よりこ」の後半と「かけ入り」は同じ踊りです。また「いりは」の後半部と「おはな踊り」は同じです。そして「しのび踊り」と「かまくら踊り」は酷似しています。歌詞はそれぞれ別になっています。「よりこ」は小山手踊り（大踊り）、「いりは」以下は永井踊り（小踊り）ともいわれ、それぞれの大字で盛んに踊られていました。昔は伝承されてきた歌詞の全てを歌っていたため、現在よりも遙かに長い時間を踊っていましたが、美しいけれども単調な動作が続くので、現代人の時間感覚にはなかなか合わなくなり、繰り返しを減らして短縮化されています。

ばか踊りは、大踊の儀式めいた雰囲気はなく、娯楽性があるので多くの人々が参加できます。西川のばか踊りの最大の特徴は輪にならず、ほとんどが横列になって踊るところです。盆踊りといえは輪踊りと思われがちですが、行列のイメージを掻き立てる点で独特のものといえるでしょう。踊りの振りとしては特に奇抜なものはありませんが、最も難しいものとして「追い分け」が挙げられます。何度も扇を斜め交差させながら廻る踊りで、とても優雅です。この斜め交差の動きは「高い山」などにも見られます。音頭取りは大谷芳史さんと今久子さんです。





出谷の盆踊り (田花三蔵撮影)



こどもやかいに、ようまく踊らんかいし  
足が遠うから、足はまれば、えんが江わ...

練習したんや、毎晩したわ。3,3,3

昔は民家でした、言うとな、たな  
あちち回、て

足角には、おなかが、つら、て、こと  
あると思う



十津川村の南西部に位置する西川区には、二つの川すなわち西川と上湯川があつて、それらが合流して十津川へと流れ込みます。迫西川の流域には八つの大字があり、川沿いの国道四二五号線の峠を越えると和歌山県龍神村に入つてゆきます。他方、上湯川の流域には二大字あり、そのうちの一つが出谷です。川沿いの県道はその先で峠を越え、これも龍神村へと繋がっています。この二つの峠を通る車はあまりないといわれるほどの難所でもあります。四二五号線の峠を牛廻越、県道の峠を引牛越といひます。牛とともに峻険な峠を越えていた昔の人々の労苦が偲ばれる地名です。出谷の人口は西川区では重里に次いでおり、この二ヶ所で盆踊りが開催されているのは、住民の多さと多少関係があるようです。

出谷の盆踊りは八月一三日に開催されますが、昔は広い敷地のある人の家々を回つて踊つていたとことです。一時期に一五日になつたことがあります。西川区と踊り手の取り合いになるといふことで一三日に戻されました。一三日出谷、一四日平谷、一五日出谷という順番が今では定着しています。これは言い伝えですが、西川の大踊りは出谷から教つたという話が残っています。それについては西川区の人も承知しているようですが、はっきりとした証拠はありません。現在では西川区が大踊の本場と思われていますが、かつてはそれだけではない分布が十津川村にはあつたということです。確かに、出谷の盆踊りは豊かな伝統をもつていて、二〇〇三年(平成一五)に収録された動画では三八曲が収められています。しかも各曲を誰が踊るのかというところは予め決めておらず、収録当日に保存会長から伝えられたのです。いかに出谷の人々が真剣に練習し、伝承しようとしていたかということをおうかがわせるエピソードではないかと思ひます。

出谷の盆踊りのレパートリーは「川堀り節」「出谷筏節」「高い山音頭」「有田口説」「草津節」「やとや」などのほか踊りが中心で、大踊は現在では行われていません。そのうち「木曾節」「よされ節」「福知山音頭」「三朝音頭」「鹿兒島小原節」「東京音頭」が手踊りで、他は全て二枚扇で踊られます。踊りの特徴として、扇を裏返して合わせる、片方の扇を斜めに他方を斜め後ろに振る、動きを完全に止める、といった点が挙げられます。「川堀り節」「出谷筏節」「高い山音頭」に典型的に現れています。比較的単純な振りのパターンを組み合わせて四〇近い踊りを作っているの、似ているものも多

くあります。「有田口説」では一枚の扇を裏返す動作が美しく、「磯節」では扇の上に掲げて華やかな印象をもたらします。「おいとこ」では扇を重ねて斜めに打ちおろすような仕草で、十津川では珍しい動きです。「茶屋の婆さのさのさ」「おろり節」では止まる動作が効果的です。手踊りでは、「福知山音頭」が複雑で味わいがあり、本家・福知山の踊りからはかなり変容しています。

豊かなレパートリーを誇る出谷の盆踊りですが、順調に伝承されてきたという訳ではなく、途中で廃絶の危機にありました。民俗芸能の継承にはコミュニティの理解や参加が必要ですが、時にキーパーソンがいて、発展に大きな貢献をします。衰退傾向の出谷の盆踊りを救つたのは千葉孝さん(平成一九九〇)です。千葉さんは元は筏師で、のちに村会議員を務めました。字の方の証言によると一九六〇年代には盆踊りはやっていたが、音頭取りで踊りが大好きな千葉さんが子どもたちに教え始めて復活ののろしをあげたそうです。特に大きな転換期となつたのが一九八八年(昭和六三)の奈良シルクロード博覧会に招聘されたことで、それ以後、とりわけ熱心になりました。千葉さんの尽力で一九九八年(平成一〇)には「川堀り節」と「出谷筏節」が村指定の無形文化財となりました。音頭取りの養成が急務で、継承者が出るまでは平谷の音頭取りである佐古金一さんに本番での音頭をお願いしています。



出谷の世帯数 58、人口 110





も奥深い踊りであるといえます。

また、西川では必ず右足から踊り始めるといったルールもあります。名称はばか踊りですが、とても奥深い踊りであるといえます。

これを知っているとますます楽しい

## 盆踊り 大盛り一口メモ

文／中川眞

### 踊りと舞扇

舞扇を巧みに操ること、そして踊りの種類の多いことが、十津川のばか踊り(扇踊り)の特徴といえます。扇は親指、人差し指、中指の三つの指でつまむように持ちます。それを持ち上げ、表にしたり裏に返したり、合わせたりします。十津川の人は扇を「振る」といいますが、達人が振るとまるで蝶々が上へ下へと飛び回っているような華やかな印象を受けます。踊りを習うときは、どうしても扇をうまく使いたくなりますが、まずは足を合わせなさいといわれます。足が合っていれば扇は勝手に合うからと。なかなかうまくいきませんが、ある程度踊れるようになると、なるほど足に合せて扇が勝手に動くという感覚が生まれてきます。二〜三曲を完全におぼえると、あとは割と楽に踊れるようになります。その字で使われる踊りのパターン(四〜六拍単位)は限られており、それらの組み合わせによって個々の踊りが成立しているからです。踊っていて奇妙な感覚になるのは、必ずしも歌の周期とは合致しないことです。また、西川では必ず右足から踊り始めるといったルールもあります。名称はばか踊りですが、とても奥深い踊りであるといえます。



武蔵

### 灯籠

大踊のときに、灯籠を吊した笹竹が踊りを囲むように登場します。昔は灯籠の中に蠟燭を立て、直火で踊りに使われていました。踊りの最後の場で激しく動くために籠面の紙に火がつき、燃えていたそうです。しかし近年では蠟燭を入れないので燃えません。少しずつ補修して使っています。従って、灯籠を作る技術が徐々に失われてしまいうる危険があるとのこと、小原では技術の継承に注力しています。小原の指示書によれば、基本材料は杉板(柱目板)と竹です。杉板は樹齢八〇〜一〇〇年のものを、竹は三年ものを使います。これらの樹木を伐るのは九月から一二月の闇夜に限るとされています。闇夜に伐ると虫に食われないうちという言い伝えが昔からあるからです。組み立てには釘、ボンドなどが用いられ、彩色紙や色セロファンなどが貼つけられます。お盆の時節に、先祖の霊を迎えるための切子灯籠を家の軒先に吊る地方が多くありますが、十津川の盆踊りの灯籠も同様の意味合いをもっています。

### しな

「あまり長いのも 踊りかね見かね ここできりやけて しななえらら」(折立)。これと似たような歌詞が、全ての字で歌われます。「あまりこの踊りを長くやっていると、疲れて踊れなくなるし、見るのもつらくなるから、ここで終わりにして、踊りを変えよう」という意味です。ばか踊りの最後に歌われます。音頭取りから踊り手に対して、この踊りはここで止めますよという合図が出されるのです。ですから、この歌詞を歌い終わると踊りはピタッと止まります。ここでいう「しな」は踊りそのものを指しますが、別の意味でも登場します。「踊りよ踊るなら しなよく踊れよ しなよよいのは よめにとる」(湯之原)。この「しなよく」に注目したいと思います。これは十津川の踊りの美的価値を表す言葉です。上手な人を評するのに「あの人は上手い」とはいわず、「しながいい」といいます。そこには「エレガントな」とか「流れるように」などといった踊りの理想像がイメージされているのですが、では具体的にそれを分析して指し示すのはとても困難です。まさに直感でしか把握できない世界なのかもしれません。

## 復元

文／大谷芳史(西川大踊保存会長)

私が西川大踊保存会に平成15年頃に入会したとき、踊りを憶えるために先輩会員の方から2本のビデオテープをいただきました。1本は盆踊り本番の様子を撮影したもので、もう1本は初代会長(玉置道雄氏)が大踊を踊っているものです。それらを見ながら少しずつ練習をしました。そんな時、大踊を撮影したテープに、見たことのない踊りが映っていました。1987年に大阪大学の調査班によって撮影されたものです。歌本で確認すると、いまは踊られていない大踊だったのです。好奇心から私はそれらも一緒に憶えました。その時は、その踊りをどうするか全く考えていませんでした。ただ「踊ってみたい」との気持ちだけだったのです。それからのち、2014年に滋賀県で開催された民俗芸能大会に、奈良県代表として当保存会が出演することとなりました。周りの方々の後押しや協力により廃絶曲の一つ「かまくら」を上演、それから以後は、毎年地元の盆踊りで踊っています。大踊といわれる古い踊りは、歌が難しく、動作も複雑で憶えるのに時間がかかります。また賑やかなテンポではないのでパッと見た目の面白みに欠けます。しかし大変美しい踊りです。可能な限り踊り続けたいと思います。今後、いかにして伝えていくかという課題に取り組んでゆきたいと思っています。

## 盆踊りの担い手

文／中川眞

地域の民俗芸能は、ある程度の人口ボリュームがないと衰退する可能性があります。必ずしも地域の住民全員が芸能に関心があり、演じたり継承に関わったりするわけではないからです。これまで十津川では保存会をつくったり、子どもに教えたり、役場が道具の支援をしたりと様々な方策が講じられてきましたが、衰退傾向は続いてきました。小学校が合併したせいで、個別の字の踊りを教えることも難しくなり、いわば万策が尽きた状態だといえます。実を言えば日本中でこういう問題が起こっており、十津川だけではありません。しかし芸能の継承を「地域」という枠組みから外すと、小さな光が見えてくるような気がします。

例をあげますと、大字武蔵に毎夏に通っていた人たちが2012年に大阪市内で月に1回の稽古を始めました。指導は西宮市在住の武蔵出身者をお願いしました。夏に盆踊りに参加するだけではなかなか憶えられないので、通年で練習したいという素朴な願いで始められたのです。盆踊りに魅せられた人たちからの発案です。このメンバーが中心となって知り合いを引き連れ、夏には30〜50人の規模で盆踊りに参加するに至っています。字からも歓迎されており、とうとう2019年に開催された地域伝統芸能全国大会では、保存会の方々に混ざってメンバー有志が踊りを披露するという一幕もありました。もちろん芸能の担い手の中心は地元の方々ですが、地縁のない都市の人々もまた芸能の持続的な継承を支える一つのパートになり得るのではないかと思います。

京都市でも2019年より大字小原の踊りの稽古の準備が始まり(コロナのために休止)、奈良市では2021年に西川地区の踊りの稽古が定期的に始まりました。特定の地域の芸能を別の地域の人々が(全面的に、あるいは部分的に)担うという現象は、近年、各地で見られるのです。東北地方の中野七頭舞や鬼剣舞といった人気のある芸能のみならず、様々な地域において広がりを見せています。そうなる郷土芸能とはいったい何なのか、という問いに直面するでしょう。地域の中だけでもあったものとは別の新たな意味がつけ加わっていきます。コミュニティが消滅しても芸能だけが残る可能性もあるのです。私はそれをポジティブに考えているのですが、皆さんはいかがでしょう？



# 平谷

平谷地区では、餅つき踊りが村の無形文化財に指定されており、小学校での学習発表会に向けた練習を中心に子供達への伝承が行われています。餅つき踊りは供養の踊りである大踊りとは異なり、家を建てる時や結婚式、遷宮などおめでたい場面で踊られてきました。発表会以外では平谷地区の福山神社で毎年行われるお祭りで奉納踊りとしても舞う他、盆踊りの時にも踊られます。餅つき踊りは餅つき棒の踊り、いかきとおけの踊り、扇踊り、の3種類の踊りがあり、主に中央の桶、いかき、餅搗き棒の踊りを子供達が担っています。

# 出谷

出谷地区では村の無形文化財に指定されている「筏節」を盆踊り本番や、学習発表会に向けて練習したり、天一神社のお祭りで奉納する伊勢音頭や餅つき踊りなどを子供達に伝えていきます。お祭りの時には出谷の子供達に加え、上湯川の子供達も混じって踊り、お揃いのはっぴを着て大人の真似をしながら踊ります。出谷の「筏節」は簡単な振り付けなので、パターンを覚えてしまえば早いですが、扇をただ振るのではなく、扇を綺麗にみせ、表現するとなると苦戦する子供も多いと言います。

# 西川

西川地区で、西川郷土芸能の入門編として子供達が最初に触れるのが和歌山県龍神村から伝わった獅子神楽です。盆踊り練習の前に獅子神楽の練習を行い、毎年、地元の川合神社の例大祭の日に獅子神楽を披露します。獅子神楽をきっかけに伝統芸能に親しみ、将来盆踊りの担い手となって欲しいという想いもあります。大人でも重く感じる獅子舞の頭を抱えながらの激しい動きに苦戦しながらも、熱心な子は年下の子に教えるという場面も見られます。現在の獅子神楽は、肩車や、側転といった動きが取り入れられ、龍神村から伝わってきた当初とは形を変えながら伝えられてきています。



獅子神楽 (大谷淳子撮影)

## 地区それぞれ 子どもたちへの伝承

文 / 土井麻利江

## 盆踊りの未来について

文 / 久保田裕道 (東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長)

お盆の頃になると、民俗芸能を見に出かけている。近頃はどこへ行っても御多分に漏れず、厳しい状況にあるという話ばかりだ。踊りがあると思って訪ねたら、今年からやめたと聞かされたところもあった。

それでもがんばっているところも、たくさんある。北東北のナニヤドヤラという不思議な名の盆踊りは、八月下旬がシーズンになる。地区ごとに日をずらして踊るので、中には毎日のように渡り歩く者までいる。なぜそんなに熱中するのかといえば、どこかの盆踊りでもクジが貰えるのだ。踊りが終われば抽選会となり、時にテレビや自転車などが当たったという。私も洗剤を頂いたことがある。もちろん賞品目当てというばかりではない。踊りそのものにも魅力があるのだ。ある町では、「北奥羽ナニヤドヤラ大会」が開催され、この盆踊りを踊るために千人

の踊り手、八千人の観客が押し寄せる。東北でまた有名なのが、「さんさ踊り」だろう。八月になると、岩手県各地で踊られる。本来は村ごとの踊りだったのが、盛岡で一大イベントとして開催されるようになり、観光の目玉とされた。本来は村によって異なっていた踊りも、「統一さんさ」として共通化が図られた。けれども、皆、自分の村の踊りを忘れたわけではない。地元では地元の踊り、イベントでは統一の踊りで盛り上がる、そんな使い分けをしている。

東北という離れた場所の話をしたが、十津川の盆踊りを未来に継承する上でも参考になる話ではないかと思う。何も真似をするということではなく、いろいろなアイデアを出していくことが大切なのだ。もう一つ例を挙げたい。岡山県で盆踊りを調査したときのこと。ご年配の方に踊っ



十津川村教育委員会提供



## 盆踊りを語る(一)



更谷慈禧(前十津川村長)  
聞き手・文/土井麻利江

Q 子供のころの盆踊りの思い出について聞かせてください。

三日三晩踊れて嬉しかったとしか覚えてないなあ。

Q 村を出ていった人も盆踊りには戻ってきますね。

外に出ていって、年寄りも死んでいって、風景も変わっていくけど、盆踊りは変わらない。盆踊りの歌きくと地元の風景が思い浮かぶ。故郷の風景の歌なんやな。村から出てった人の中にはそういう思いで盆踊りを見てる人もおるとちやうかな。

Q 十津川の盆踊りそれぞれの地区で違いますよね

ふだんは山で働いて、一生懸命山に這いつくばって働いて。霊が帰ってきて骨休みで飲んで騒いで。盆は踊って一年に一回発散する。盆踊りは輪に入ってるなんぼ。見とるだけやっただけや。

けやったらあんなに退屈なものはない。

Q コロナの影響で今年の十津川盆踊りは中止になりましたが…

コロナになってまた新たな時代ができるような感じがする。自分で何か創り出すことが楽しいというか。昔みたいな、東京におらな商売できんでみたいな時代じゃなくなつて、心の時代になっていく節目になると思う。盆踊りみたいに、自然とともに、土地とともに汗かくのがいいんや。自分らの時は東京で文化ができてきたけど、いまは地方の良さがもう一回見直されて、自然との関わり方とか地域特有の良さとかから新たな文化が生まれてくる。そんなサイクルで世の中回ってるんやうかな。コロナで自然の中で過ごすとか、人がおらんところにいつて、周りの人に気遣

いしながら生きるみたいなそんな時代にきとるんかな。

Q 村の人にとって盆踊りとは何なんですか。

今はどんだんやんか。でもこれから高齢化も止まって、新しいものが出てきて、潰れることはないと思う。山も歴史も繰り返してや。山は増える。崩壊するんやなくて。幕末から新たな時代になるときみにたいに。人が潰れてゼロになるんやなくて繰り返していいんやうかな。そんな中でいろいろな芸術とか伝統芸能とかができていく。いま十津川に残ってる盆踊りを見てても、復活とか継続とかが繰り返されてる。

Q 盆踊りが残っていくための秘訣は何でしょうか。

一番はどうしても好きなやつがおるといことやな。好

きて踊つとるさかい、それに共感して、ああいなあと周りも自然に思う。親父が踊つてて俺も踊ろうとか繋がっていくんやうな。そういう人

らが一生懸命やりよるさかい、これはつぶせれんやない、周りも思うし。そして村んなかだけじゃなくて村外の人にも広がって、人がついてくる。

Q 観光資源としての盆踊りもありますか。

知らん人が来たら「まあ一杯飲めよ」とか言って地元のコミュニティに引き込んでいく。そういう人同士のつながりが楽しいな。伝統を引き継いでいこうという環境じゃないが、外の人が来たときに勝手に感じられる。地元の中に入っただけでその中で培われていく雰囲気まで作ることが観光かなと思う。山も手が

入れせんかったら、くすんでいくや。地元が一生懸命やつてる姿を見てもらう、それが観光やと思う。

Q 今後の十津川はどうなるでしょうね。

「先人の生きざまに惚れなおししようや」というのを言ってる。先人はもつと苦しい思いしとったんや。幕末の京都の御所の護衛で、ただの山猿やつたのに石もほとんどないのに、行くのにも出張費なんか出やんから自分の山切って、売ってそれで行ったんや。そんなん思うと当時の人らはどんな生き方してたんやうな。十津川魂というかそういう生き方がだんだん減ってきたというのがな。これが十津川人やみたいなの、また言っただけや。昔はそんなこと思ひもせんかったけどな。

## 盆踊りを語る(二)



小山手修造(十津川村長)  
聞き手・文/中川眞

Q 村長は盆踊りに楽しそうに参加なさってますね。

下手の横好きという言葉が一番ふさわしいのではないのでしょうか。中学から五條市の方に出ておりましたのですが、お盆とか正月には必ず十津川に戻ってきました。仕事についてからも必ず参加しておったことです。盆踊りといえば出身の風屋の盆踊りで、都会での盆踊りはピンとこないし、参加したこともないですね。盆といえば十津川におりましたから。

Q 小さい頃はどうか。

小学生の頃は踊りの仕方がよう分からなかったです。踊れると言ったら、十津川音頭くらいなものでした。

Q 盆踊りがなくなると淋しいと村の人々はいわれますが、盆踊りは人々にとってどんな意味、

役割があるのでしょうか。

アイデンティティですね、村の基本っていうのは字だと思っておるのですが、字の住民である、血のつながりといえは大袈裟かもしれませんけれど、そういった地域のつながりを感じる場が盆踊りだと思ってます。他のところに出て行った人も集まるんで、子供の頃、小学生時代です、感受性の強い時代を過ごした仲間たちとのつながりを一番感じるタイミングだと思っております。長い時間をもとに過ごした仲間たち、歳の上とか下とかを含めたつながりを、年に一回感じられるのが盆踊り。大人になってからは一杯入ってますんで涙もろくなり、なぜか毎年泣いてるという次第です(笑)。

Q 村の人口の減少で盆踊りの将来も不安ですが、何か対策はあ

りますでしょうか。

盆踊りは踊り方がわかってないと楽しめないということがあります。風屋の方でも踊りの練習をしてるんですが、教える方もなかなか高齢化してきて難しい面もあります。いま先生方に踊りの撮影をしていただけてますが、それをウェブでも見れるようにして、村内の人はもちろん、村外の方も十津川のHPなんかを見て踊り方をマスターしてもらえればと思います。

伊勢音頭とかをちゃんとして、(ウェブだけでは)十分条件じゃないですけど、踊らないことには楽しめませんので、見るだけではね。踊りをマスターするためのコンテンツを充実させていく、広げていくということが、盆踊りを盛り上げていたり、十津川への帰属意識を高めてい

く機会になるんじゃないかと期待しています。

Q 盆踊りは村の人と外の人をつなぐ媒体に思います。最近では都市の人が大勢やってくる字もありませんが、どう思われますか？

ポジティブに考えております。十津川村の夜には真の闇っていろいろあります。その中でポツと明るい盆踊りは、都会の人にも新鮮なんじゃないかと思えます。子供心に、盆踊りという大人の世界を垣間見るといふか、妙に甘酸っぱいという感覚をもってるんですが、男女の出会いがありましたね。それも含めてさらに様々な交流の場になればいいと思っております。

Q いま制作している盆踊りの新たな映像や歌詞集を、今後ど

のように活用していけばいいでしょう。

十津川テレビという媒体があります。これと連動できますね。また、学校の教材みたいなものにして、小学生に提供できないかなと思います。子どもたちが盆踊りに行くといえ、大人たちもついてきますし。

Q では最後に何かひとことお願いします。

盆踊りと言いますと先祖をお迎えるのですが、そういった過去と現在さらには未来を一体化するような、縦のつながりと横のつながり両方が感じられるのが盆踊りの時間帯だと思いますので、大事に継承していきたいと思えますし、それは村長としての責務だと思っております。



# あとがき

文／中川眞

YouTube チャンネル

「奈良県無形文化遺産映像アーカイブ」開設



十津川村の盆踊りについては谷村晃編『十津川の盆踊り』（アカデミアミュージック、1992）、奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能 奈良県民俗芸能緊急調査報告書』全2巻（奈良県教育委員会、2014）に詳しい報告が掲載されています。しかし一般には届きにくく、また近年のインバウンドの増加による新しい文化ツーリズムの隆盛のため、ある程度のボリュームをもちながらも読みやすい解説書が求められるようになりました。きっかけとなったのは、平成31年（2019）に京都市の伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムに採択されて盆踊り協議会を立ち上げ、現状や継承を10字の関係者とともに話し合ったことでした。令和2年（2020）に新型コロナの蔓延となり盆踊りは中止となりましたが、逆にこの機を捉えてデータベース作りに取りかかりました。サントリー文化財団の助成金を得て35年振りに全字での悉皆調査を実施しました。そして令和3年度（2021）には十津川村が文化庁の「地域文化財総合活用推進事業」に採択され、実演の撮影や歌詞集の刊行を実施しました。これによって十津川の盆踊りに関するアーカイブは極めて大きなボリュームとなり、盆踊り関連としては第一級のものとなりました。本書はこれらの事業から抽出された結果ともいえます。その過程では、踊り団体はいうに及ばず、東京文化財研究所の久保田裕道氏、奈良県文化財保存課の森本仙介氏、十津川文化協会の佐古金一氏、京都市伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスの萩原麗子氏からは多大な協力、支援をいただきました。ここに記して感謝の意を表したいと思います。本書が倉庫に居座ることなく、あらゆる所で動き回り、多くの人々に刺激を与えて、盆踊りのつぎがない継続と発展につながるよう祈りたいと思います。



武蔵の盆踊り（児嶋啓輔撮影）

## 十津川村の盆踊り解説集

—奈良県最南端・十津川村の踊り十景—

編集・発行 奈良地域伝統文化保存協議会

監修 中川眞、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課

発行日 令和4年（2022）3月25日

一部の原稿は京都市の「伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス（TARO）」の平成31年度「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」事業による成果です。